

小学唱歌「村祭り」(♪村の鎮守の神様の 今日ほめでたいお祭り日 どんどんひゃらら)で謳われる村の鎮守様とお祭りに対して郷愁を持つのは、私共の年代以上であろうか。

私が住んでいる新座市の畑中地区には無住ではあるが「須賀神社」が鎮座し、例祭が行なわれ、地域の老若男女の初詣で賑わう。地区の古老に伺ってみなければ解らないが、畑中地区の所謂「村の鎮守様」であろう。

かつての神仏習合の名残でもあろうか、当地の比較的大きなバス停の名称になっている東福寺の隣に小さな祠とコンクリート製の鳥居、鳥居から祠までは数段の石段という、小さな・小さな鎮守様である。それ故に如何にも“おらが村の鎮守様”と言う風情を漂わせている。

● 7月10日須賀神社の例祭の状況



何処から集まったのであろうか、祭り好きで、神輿を担ぐことが飯よりも楽しいと言うグループが夫々に衣装と言うか法被を凝らして神輿を担いでいる。伊勢神宮の神輿を担いだ時が最も印象的だったと語る対馬さん(写真神輿の前の方)の話によれば、年中365日何処かでお祭りがあるらしい。それ位に日本人は祭り好きなのだろうか。神輿の会に入っていると言うお隣の奥さんに促されて小生も神輿を担いでみた。いやはや難しいものだ。あの独特のリズムに合わせて上下運動を繰り返そうとするのだが、思うに任せぬ。対馬さんに聞いたところでは、担ぎ棒と肩を離さない事がコツだという。さもありませんとは思いつつも難しいものであることを汗を掻きながら実感し、体験した次第である。町内を練り歩く。要所・要所では酒食を準備して御神輿を迎える。御払いを受け、家内・町内安全、商売繁盛を祈願し、一本締めで締める。神輿の上に立って神輿の練り歩きの音頭を執るのも難しそうだ。小さな子供も上手に音頭をとる。神輿が巡航する地区の者も総出で迎える。中には外国の方も見える。地域と担ぎ手とそして御神霊が一体化する、それが御祭りであり、多くの人々を今尚引き付けて止まないのであろう。

● 縁起その他神社世話人等からの聞き書き

夏祭りの祭礼に併せて神社にお参りした。世話人の方等に色々と質問したが、素が神社の縁起・由来については判然としなかった。馬場地区の氷川神社の宮司を招請して祭礼を執り行っているということなので、何らかの関係があるのだろうか。世話人20名余り、氏子が200名余と言うことのように。御神体は、「天の神」「地の神」と言う二つ

の祠に祭られている「金色の御幣」である。珍しいのか？

そもそも須賀神社とは如何なる神社なのか。HP を調べてみると日本全国に須賀神社が存在している。徳川家康の小山評定・関ヶ原戦勝祈願で有名な下野の須賀神社、京都や甘木の須賀神社、都指定有形文化財である三十六歌仙の絵を保存している東京四ッ谷の産土神（うぶすながみ）である須賀神社等々。

須賀神社の例に見るまでもなく、全国には同名の神社が多数ある。これは祭神を勧請してきた為である。神道においては「神は無限に分霊する事」ができ、分霊しても本来の神威が損なわれる事はないと言われている。神社の中で数が最も多いのは総数の 1/3 を占めるとも言われる稲荷社である。本社は、伏見稲荷で、奈良時代に秦氏一族が農耕神を祀ったのが始まりと言われている。次いで多いのが八幡社である。八幡宮の発祥は、聖武天皇創建（725 年）の大分の宇佐神宮である。

平安時代には石清水八幡宮が分霊され、関東の総鎮守とみなされる鶴岡八幡宮が造営された。村の鎮守様として八幡社が多いのはこの様な経緯があるのであろう。

事のついでに 3 番目を紹介しよう。天照大神を祀る、伊勢神宮を本社とする神明社である。

須賀神社に本社があるのか？専門家に御教示を願わねばならないが、本社と称する社はないようだ。須賀神社の「須賀」と言うのは、御祭神である、須佐之男命（スサノオノミコト）に由来する。出雲の国の簸の川上で八俣の大蛇（おろち）を成敗した後宮造りの為に訪れた地で「吾、この地に来たりて心須賀須賀し」と宣り給いて宮居を定めたとする故事に基づき、宮の名前を「須賀」と名付けられた。『古事記』には須賀の宮、『出雲国風土記』には須賀社と記されている由である。蛇足ながら、スサノオの命が須賀宮を造る際に雲の立ち上るのを見て「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」を歌を詠んだとされ、参拝者は歌を奉納するしきたりがあり、須賀神社は和歌発祥の地と言われる。

この様な点を考慮すると須賀神社の本社は出雲の「須賀神社」と言うべきだろう。